



# OVERSEAS

## Vietnam —ベトナム—

### 海外事情【寄稿】



# 理想を追い求める国



高木 収 TAKAGI Osamu  
日本交通技術株式会社  
国際部技術課

#### 河内＝ハノイ

近年何かと注目の多い国ベトナム。日本から約6時間のフライトで到着出来るこの国を旅行等で訪問された方は多いのではなかろうか。ベトナムの都市の一つ挙げよと言えば、多く方が「ホーチミン」をまずは思い浮かべるであろうが、筆者の勤務地はベトナム北部に位置する首都「ハノイ」。昔、漢字を使っていた時代には「河内」と記され、その字の如く中国から流れくる紅河という大河を中心と

したデルタ地帯に位置する都市である。

市内にはデルタ地帯であるためか、はたまた、かのベトナム戦争時に爆撃された跡地なのか、多くの湖と池が点在する。それが現地の人々や観光客の憩いの場となり、ハノイ独自ののどかな雰囲気を醸し出している。そこは、朝夕は健康のため、ジョギングやエアロビクスに汗を流す人が集い、夜には若者達のデートスポットになったりもする。非常に便利な場所と言えよう。

ただ、水で囲まれた街であるが故に、局地的な雨が降ったりすると河川が氾濫し、たちまち市内が冠水してしまう。現在、筆者が通勤する事務所は市内幹線道

路から低い路地にあり、大雨の後はその路地が池と化してしまう。普段からモーターバイクで渋滞気味である幹線道路は、市内の排水状況が良くないことも影響し、大雨の降った日には必ずと言っていいほど大渋滞となる。2008年末の記録的な大雨が、市内交通や市民の生活に大打撃を与えたことは記憶に新しい。(写真4)

また、市内は年中雲に覆われているような感じで、悪く言えば南国なのに開放感が無い、良く言えば落ち着いた、と形容できようか。兎に角、南国なのに冬場はコートが必要なくらい寒くなることもあり(10℃以下まで下がる)、少し風変わりな都市と言える。

#### ベトナムの食文化

そんな都市の説明はさておき、日本でも流行?!のベトナム料理にスポットを当てたい。ベトナムの食文化は、古来の中国文化と19～20世紀にかけてのフランスの植民地統治によるフランス文化の影響により、両国の食文化が見事に融合している。この事実気づかされるまで、ハノイの町に到着して



写真2 憩いの場



写真3 湖畔で一杯



写真4 まさに河の中の町

から2日とかからない。

朝、街に出ると、ベトナムでもポピュラーな麺類の一つで、平打ちライスヌードルの類を、プラスチック製の素朴な机と椅子を並べただけの露天の店先で、多くの人たちが通勤前の朝食を取っているのが見受けられる。中には、揚げパンをそのスープの中に入れて食べる人もいれば、エスプレッソコーヒーをすすっている人もいる。日本人にとってそれは信じがたい食文化バランスである。

そのベトナムで最もポピュラーな麺類の一つであるフォーには、米麺に牛骨から取ったスープをかけ牛肉をのせたものと、鶏スープをかけ鶏肉をのせたものの2種類がある。これに、好みによって香草やモヤシを加える。日常的によ

く食べられているメニューである。ベトナムは南北に長い国であり、地方によって気候や食習慣が異なるため、食材や味付けなどにも地域ごとの差がある。ベトナムを大きく北部(ハノイなど)、中部(フエなど)及び南部(ホーチミンなど)の3つの地域に分けて見ると、北部の料理は他の地方に比べやや塩辛い味付けとなっており、中部の料理は辛い味付けのものが多く、また、南部の料理は甘辛く濃い味付けになっている感がある。

#### 健康ベトナム料理

さて、ベトナムに来て必ず食べていただきたいのは、絶対に鍋料理である。ハノイの町の通りの中で鍋通りと呼ばれている所がある。その通りに限らず、どこへ行

っても鍋料理はあるのだが、魚、鶏肉、牛肉、きのこ、野菜ととにかくそのバリエーションには事欠かない。ベトナム人も昼夜問わずビール、ワイン、ウォッカなどを飲みながら鍋を食べる。このワインもフランス文化の影響なのであろうが、小さな雑貨店や駅の売店などにも置いてあることが我々日本人には信じられない。

その鍋の特徴は野菜が多いことである。さまざまなハーブ、ねぎ、空芯菜などその種類にはことかかない。この野菜の摂取量が多いことが、ベトナム女性のスタイルの維持の源であると個人的に思っている。日本人も相当、鍋は好きであるが、ベトナム人の鍋好きには絶対かなわない。

また、日本の鍋の食べ方も少し異なる。日本人ならば、その鍋



図1 ベトナムの地図



写真1 ハノイ市内



写真5 ベトナム鍋。最近では電気コンロも流行



写真6 ここでは言えませんが○○の肉です



写真7 普段から多いモーターバイク



写真8 渋滞の様子

の具を全て食べ終われば、必ずと言っていいほどご飯をその鍋に入れ、生卵を落とし「おじや」にしたがるものである。しかし、ここではそうはいかない。まず鍋の中にご飯を入れる習慣がないどころか、まったくもってご法度なのである。なぜかは不明だが、そうしようとすると必ず店員が寄ってきて、「いかん、いかん」と怒られる。ベトナムでは食べ終わった鍋のスープをご飯にかける。そのオプションしかない。でも、これが慣れるとベトナムのただでさえ粘りの少ないご飯がさらに舌触りよく、お茶漬け風になってしまう。極めつけ

に、少し塩辛い醤油ベースの魚の煮込みをこれに加え、ナスの漬物とともに食すると、これは美味としか形容しようのないものに化けてしまうのだ。読者の皆様がベトナムを訪れた際には、ぜひ食してほしい筆者一押し一品である。(写真5)

なお、現地の人たちからよく食事に誘われることがあるが、外国人を招いてする食事は往々にして彼らにとってのご馳走である。例えばそれがどんな料理であったとしても箸をつけることが礼儀作法と言えるので、決して断るべからず。(写真6)

兎に角、色々あるにせよ「ベトナム料理は健康かつ美味しい理想の食事」と言っても言い過ぎではないかもしれない。

#### ベトナム交通戦線異常あり

ハノイの町を散策するといろんな事に出会う。現在、町の道路の状態はかなり改善され、両側に広めの歩道が整備されている。これを「歩道」と呼んでいいのか疑問ではあるが、歩道はモーターバイクの駐車スペース、露店の調理場とお客のテーブル、建設資材置き場と広く活用されており、真っ直ぐ歩くことさえ容易ではない。安全柵も無く歩道を利用し材料の吊り下ろしを行っている建築中の家の前を通行する際には、歩行者自身が危険と安全を判断し自然の安全柵(空間)を設け歩行して



写真9 魅惑のアオザイレディー



写真10 女性役員と

いる。

また、戸惑うのが道路の横断である。外国人は何度も安全を確認し、立ち止まったり急いだりと不器用に横断するが、現地の人はモーターバイクの間を何事も無くスムーズに渡り抜ける。これは「横断歩道」についても同じこと。歩行者優先なんて思わないこと。流れには逆らわず車の来る方向を見ながら歩くペースを変えずに横断する。これが基本の道路横断方法。特に法律で定められているわけではないが、自分の身を守る安全対策の一つである。

しかし、ハノイとホーチミンの交通事情は最悪で、道路交通法が確立されないままモーターバイクが異常に増え続けている。仮に日本の道路交通法を適用すると、警官も含め全員「逮捕」となる状況。

ベトナム政府より「2001年6月1日よりモーターバイク運転に関しヘルメットの着用を義務付ける」と発表されたが、多くの国民より「視界が狭くなり危険」「ヘルメットの持ち運び管理が困難」などの苦情で、6月1日の2週間前に発表を取り消した。自国に合った「道路交通法」の確立が急がれるが反応は鈍い。それでも2007年末に、ようやくヘルメット着用が義務化された。罰金がヘルメット料金と同額ということもあり、何とか普及するに至っている。

#### 魅惑のアオザイ女性

先にもベトナム女性のスタイルについて述べたが、確かにスレンダーな女性が多い。というも民族衣装である「アオザイ」は身体のラインがしっかりと見える衣装で、これを良く見せるために彼女達は日々努力しなければならないので

ある。ただ近年、欧米の食文化も浸透してきており、食生活の変化から残念ながらスレンダー体型が崩れていく方もしばしば見かける。これはベトナムに限らず世界的なことかもしれないが、女性は美を追求するために日々葛藤・格闘しているのだと、アオザイ女性を見るたびに思う。(写真9)

そんなアオザイが似合うスレンダーなベトナム女性であるが、その可憐さと同時に「強さ」も持っている。まずほとんどの家庭が共稼ぎをしており、多くの女性がモーターバイクに乗って通勤。しかも小さな子供も学校に送り届けながら。会社の役員にも女性が多く、男性を相手に声高に議論しているのもよく見かける。それもそのはず、ベトナム戦争で男性が戦地に赴いている中、それをずっと支え続けてきたのだから当然の成り行きかもしれない。店先で妻が働き、旦那は家の奥でゴロ寝といったパターンを良く見かけるが、何れにせよ「男性は何をしているのだ」と思えるくらい働く女性が多い。ベトナムのパワーの源は働く女性にあるのだと思う。

#### 大星輝く国★

ここベトナムは諸外国、東南アジア諸国に比べ治安が良いことで評判。これは日本を離れ慣れない環境下にて生活しなければならぬ状況に於いて、非常に好条件であることは言うまでもない。だからといって日本と勝手が違うのは当然で、法律、社会基盤、生活慣習等々全てが異なると知らされることになる。

特に、ベトナムの現在の状況からは見えにくいところであるが、やはり共産圏であることの弊害をしばし受けることになる。1986年の

「ドイモイ(刷新)」政策の後、少しずつ変わりつつあるが、依然多くが国営体質を引きずっており、業務上の効率性は期待薄で諸手続に多くの時間を要したりする。また、官僚体制であることから、物事の決定に際してこちらには理解できない点が多数出てきたりする。さらには外国人ということで料金設定が割高となったり…。

本当かどうか定かではないが、かつては外国人という事で、現地公安から常に監視を受けるといった不遇に晒された話も聞く。まったく知らない政府の役人から誕生日に花束が届いた人もいたとか。

しかしながら、アメリカに勝った唯一の国。しかもその戦争が終わって30年少ししか経たないのである。前述したような状況も、ともすればそんな厳しい時代の名残がまだ残っているだけなのかもしれない。

理想と言われる生活様式で、「西洋の家に住み、中華料理を食し、日本女性を伴侶とする」というのを誰もが耳にしたことがあると思う。その理想を実現した国は無いと思うが、この国はそれを実践しようとしているように思えてならない。フランス風の建物を今でも愛し、中華文化が織り交ざったベトナム料理を食し、そして経済のパートナーとして日本を選ぶ。歴史、経緯があるが故、そんな理念を実践する国ベトナム。しかも中国、フランス、アメリカといった大国にも引けを取らなかった精神を持っているこの国が、近い将来世界を牽引する日までそう遠くはないのかもしれない。

参考文献  
図1: 在越日本大使館「ベトナム社会主義共和国概観」から参照  
写真1、2、3、4、5、6、7、8、9、10: 筆者